

B. 通時音韻論

通時音韻論

73. 対象

歴史的音声学は、ばらばらな要素または意味をもっていないものとしての音、またディスコースの中で他の音との関係において音の発展を研究してきたのである。言連鎖の中での隣接の音がある音に及ぼす影響を考慮に入れていたが、体系内での隣接の音に由来する圧力というものを忘れていた。つまりシンタグマティックな関係には注視していたが、パラディグマティックな関係を考慮していなかった。言語発展の分野に適用された音韻論は、ディスコース内での関連性という視点を失うものではないが、体系に属しているものとして(諸)音素で作られる変化に注目するのである。

通時音韻論の必要性は、1928年のハーグの国際言語学学会で Jakobson, Karcensky, Trubetzkoy によって提案された。音声変化は、実際に使っている音韻体系の機能において、またそれがめざしていた合目性(finalidad)との関係において、考察すべきであるとする。

通時態または歴史音韻論の基礎的工作は、歴史を通しての1言語の音声要素の機能と構造変化を調べることにある。この科学は、テキストの中に現われる所与の音の数世紀に亘る変形(transformaciones)を追求する代りに、体系内で変容した要素がはたしている機能の研究によって、ある体系が他の体系と交替(sustituciones)するのを説明しようとするのである。

原理として、ただ所与の体系内で機能を有しているもののうちの、厳密に有意味なもののみを問題にする、しかし、変形の起源を探るときには、意味の無いもの、つまり純粹に材料的なものである音韻外的な要素と関係することになる、つまり、音韻外的な要素とは、音声学が研究する結合変種や、音声、その他の要素などである。

静態的音韻論と同じく、通時的面においても事前に音声的な基盤としての(音)変形の純粹な音声的な歴史が不可欠である。このばらばらなので、非体系的な要素を基盤として、歴史音韻論は、統一的で

また言語学的な視点、つまり体系としての言語の視点から、これらの音声的変容を説明し、秩序づけるのである。体系の形式的要素と関連させて、どのような変容(modificación)が起こるのかを知るために、それらの音声的データが示している証拠(indicio)をまえて観察するのは不可欠である(参照 § 5)。そのためには、通時的研究において、厳格に音声的リアリズムを保持しなければならない。音声的詳細さを無視して、共時論において有効でありうる音素的分類は、通時論において価値のないものである。通時論では、これらの《余剰的なもの》は、ある変化の意味(方向)を説明できるものであるかもしれない。ある[言語]状態の記述において、両唇音や歯唇音、または単に唇音とよばれるものの区別は、非弁別的であると考えられることができる。通時的発展を探求する場合、このような区別は、保持すべきであり、それが結果へと導くことがあるかもしれない。

通時音韻論は、それゆえ次のことを研究する：

- a) 言連鎖内での音声の使用ということだけではなく、有意味な音声的要素(音素、韻律素、等々)の体系との関連や、また体系内での関連性での機能の変化を研究。
- b) 有意味な音要素の機能の変化の結果としての、体系の構造の変化を研究。

音韻的とよばれるこれら、a),b)の変化は、音声変化にその根を持っているが、それとは大きく違っているものである。音声変化はそのひろがりにおいてゆっくりしたものであり段階的である。その起源には個人的な変容が関与するが、個人的なものが段々と普及し、それが一般的なものとなる、または個々人に孤立的に、また同時的に出現する変容となり、それが規範として課されるようになる。音韻的変容は、ゆっくりとした進展ではなくして、瞬間的な真の改新(革新)である、つまり特定の体系が一般的なものとして課されるその瞬間にできあがるということであり、その時に、以前にはある程度限定されたグループで特異であったものが一般的モデルとなるのである。体系はゆっくりと進展するのではなく、突然他の体系にとって代られ、その有効性(vigencia)を失うことになる。時代を通して継起的な2つの音韻体系の間には、中間的段階とか推移の段階というも

のではない。花が果物に変わるというような、意識されない(insensible)変容というものは扱わず、根本的で突然の交替というものを問題とするのである。頻繁におこるのは、新しい体系と古い体系の2つが長い間共存するということである。古い体系がすたれてきて、新しい体系が一般的有効性および広がりを獲得して、課されることになるのである。しかしこの新旧の体系は別のものである、つまり一つの体系が別の体系へと移行するのではない。緩慢に進行しているものは、体系の創造ではなく、新しい体系の一般化である。

7 4 . 変化(複数)

言語は形式である。われわれが発話の中で使っている 音声 実体は、体系とは無関係である。形式的なものと材料的なものの関係は、動機づけられてはおらず、恣意的なものである。もし、所与の言語において、言語要素すべて、また各々の要素の音声表現が変わったとしても、その要素間で同じ区分関係が保持されていれば、発話の内での音声表現とか、またその実現体が、最初の体系とは全く異なったものになってしまったとしても、体系が最低限だけ変更されたということにはならない。それゆえ、音声的実体は体系の形式が変わることなく変化することができる。しかし音声的実体の自由な可変性(variabilidad)には制限がある、つまり体系のオリジナルの形式的関係の知覚を妨げるような混同を作る出すモーメントがそれである。まず、体系において3つの音素、A, B, C が各々、唇音、歯音、軟口蓋音として実現されていると仮定してみよう。実現体 B は、その分散の領域を広げて、(しかし C よりそれを区別している外的データを失うことなく) 歯茎音、または硬口蓋音にかわってゆくことができる。しかし C の実現体が同時に軟口蓋より硬口蓋に移ると、B と C の間の *margen de seguridad* (確実性の外縁 < 安全性の外縁 >) は判断しにくくなる。そして、別の分岐的(*diversificador*)要因が干渉することがないなら(例えば、B は閉鎖として実現され、C は閉鎖がなく実現されるなら) B と C の音声的実現体の間のちがいが知覚できなくなるであろう。そうするとこの時には、体系内では、音素 B と C の音素は1つの音素となる。

形式は実体と独立しているという事実が、音声変化の可能性を説明する。それで、たとえばもし、音素/p/がまさに[p]という音声であり、この/p/が、/b/に対して、/t/と/d/、また/k/と/g/と同じようなユニ

ットではないとすると、このような/p/という音素は、その実現体としては、[p]であることを変えることはないであろう。しかしながら実際には、(ある限度内で) /b/ではないもの、また/t/でも/d/,etc.ではないもの、また/b/, /t/, etc.の実現体と混同されないような実現体といったものであり、そのことによって、音声的には [φ], [ph]または [b] etc.であったとしても、規範によって、/p/という音素であることが認識できるのである。

それで変容の本質的理由は、言語的形式と音声的実体、抽象と具象、言語(認知されたもの lo recibida)と発話(創造的なもの lo creativo)の間の2つの事柄が同一のものでないということに存する。抽象的体系としての言語は、純粹に形式的であり、反対に個人の自由よりうまれた具体的・資料的事実たる発話は、この体系の実現されたものである。それで発話の個人語変種や改新(inovación)は、言語の社会的規範を動揺させることがある。個人的改新は、規範として一般化する時、《結果として ipso facto》体系を変容する。しかしなげゆえ、個人的改新が所与のものとなり、なぜ発話でのすべての改新ではなく、そのうちのあるものだけが勝利し、言語を変容させるのであろうか。次のように答えることができよう、相互理解の必要性の要請ということにより、言語によって必要とされまた承認された個人的な変容が一般化するにすぎないと言える。体系の弱い点を有している時、それを避けるためにもっとも好都合な発話の改新によってそれに手を加える。もし音韻的変形の起源が、物質的要因や、発話の音韻外的な変化にあるとすれば、言語はその体系的性格のゆえに ある限定された目的に誘導し、発話の変容の方向をまえて決めて決める事もある程度はたしかである。

要約して言えば、体系の形式的要素と発話の物質的要素(音声的要素)の間を結びつけている恣意性というものがあるので、それが形式的価値より独立している限り、物質的要素の変動や変異をみとめることがある。それゆえ、音声変化が可能となるのである。しかし時々音声的要素の行き過ぎた変動によって、体系の形式的関係の外的目安ではなくなるまで変えてしまうこともある。その時、これ(外的目安)は、言語の(comprensibilidad)を危うくし、その関係の網(red)を調整することにより、変容することがある。

もし言語がその中ですべてが相互に関連している体系的な有機体

であり、その研究対象がその中で話されている共同体による了解性であるとする、機能を適切に果している体系としての安定性があることを期待されることになるであろう。しかしながら、実際には反対のことが起こることがある、つまり体系は変化するのである。そして、Coseriu が言っているように、《そのようなものとして機能しつづけるために》変化しているのである。その理由としては、言語は《コード》であるだけではなく、その本性からして歴史的なものであり、単に《結果》(エルゴン)であるだけではなく、《活動》(エネルギー)でもある。それで 3 つの質問を区別する必要がある：何故言語は変化し、不変(inmutable)ではないのか、言語において、どういう条件下で変化が作られるのか、どんな歴史的条件がある変化を作るのか、の 3 つである。まず最初に、言語の移ろい易さ(mutabilidad)は、言語をその具体的存在の中で考える時に理解されるであろう。変化は言語においては本質的であり、言語は変化によって形成されるのである。『現実のまた歴史的な言語は、ダイナミックである、というのは言語活動は話すことや、言語を理解することではなく、言語によってなにか新しいことを話し、理解することである。それで、言語は話し手の表現の必要性によって採用され、採用された程度に応じて言語として機能し続ける』<Coseriu>。言語の変遷は、歴史的連続性(continuidad)が言語に与える所のものであり、永続的なものは、歴史性を欠いている。

他の 2 つの質問は、さらに意味がある。一つは、変化の動機(原因または目的)についての質問、もう一つはある所与の時期、所与の言語で特有の変化がおこった理由を探求することである。次にどれが変化の諸要因となるのかについて考えることにする。

75. 変化の諸要因

歴史音声学は、言連鎖での文脈によって条件付けられている変化の場合を除いて、同一の言語にとってのすべての外的な原因によって音的変容の起源を説明してきた。変化の合目性に関していえば、いわゆる音声変化の盲目的行動の結果として変化を考えるという結論に達した。一方音韻論は別の結論に達した。

最初に、音韻的方法の通時態への適用の初期には、偶然(azar)が言

語の変化を支配しているという考えに対して異論の声を上げた。この極端な信念に対して、別の少しオーバーな考えかたが提起された、つまり変容の目的論的な側面を、まず最初の検討項目に入れるという信念がそれである。すべての変容は、体系によって要求される目的に向かって進む。このような体系としての音韻体系は、よりうまく機能すればするだけより完全になる、つまり言語の目的をうまく果せばそれだけ（話し手の正確な相互のコミュニケーション）より完全なものとなる、とする考えである。それで、すべての変容は、弱点や不安定な点を排除しながら、体系を完全にしようとする方向に進むことになるであろうとする。それで、音韻的体系の進展において、調和への傾向(*tendencia a la armonía*)を示すことができる、とした。しかし全体系はその責任を果していれば、その機能にとって適切である、つまり調和しているということになる。この体系についての極端な決定論をともなう通時態での音韻的方法論の初期の頃の確言は、後になって破棄された。しかし、こういう考え方の意図は保持されている、それは、音韻変化は意味（方向）を持ち、目的を持っている、ということであり、単に盲目的に作用している力の単なる表示ではない、というものである。なぜと云うこと以上に、変化はなんのためにということの研究しなくてはならない。もし、音声変容において、ある合目性が認識できたなら、原因や更にそれを作り出した条件は、体系の外側に存するだけであるとは出来ないのは明らかである。歴史音声学によって示された変化の外的要因と共に、通時音韻論は、他のいろいろな内的要因、つまり言語の体系や発話での機能によって要求される要因を導入する。この2つの要因のタイプを違った現象として研究するという事は、それらが独立しているということではない。通時的現実では、お互いにそれらは音変化を構成し変化の内に見出される。それでしばしばどちらかに優先性があるかを決定するのは不可能である。

76 . 外的要因

発話において作られる音変化のすべては、すでに見てきたようにならずしも音韻的変形を伴っていない。しかし、それらの変化はすべて、その中で作られる言語の体系にそむいて作用している。それらはつまり不均斉、乱れの要因である。反対に内的要因は常に体

系の均斉の再建へ向かう傾向にある反応である。それゆえ、音韻的変質(mutación)は、対立する作用によるものであり、またこれら二つの要因、つまり発話の個人的自由という要因、また言語の均等化への統合という要因の組み合わせによる。

外的要因の中で、次の二つのタイプのものを区別すべきである。

- 1 . 言語活動の利用権を持つ人間本来に固有の要因
- 2 . それと独立的しており、また物質的および文化的環境によって条件付けられてる要因

a) 人間の本性に固有の要因

発声器官(aparato fonador)の調音的可能性。聴覚器官(aparato auditivo)の知覚的容量、これらはいへん幅は広いけれども諸器官の特有の構造によって課される制限を有している。限定された音声的特徴は、発声器官によって同じように実現されるには、困難さを示すであろうし、また他の特徴にとって替わられることになる。同様に、ある音声的要素では聴覚的非両立性(incompatibilidad)ということが問題となるかもしれない、しかしそれは後日、排除されることになるであろう。たとえば、口腔の最大の開きにおいて、高音調共鳴(aguda resonancia) (または硬口蓋)と低音調(grave) (または軟口蓋)の間のちがいは殆ど知覚できない。硬口蓋音素 /q/ と軟口蓋音素 /q/ は、もし/ɛ/と/o/に変形されないなら、つまり高音調-低音調(agudo-grave)のちがいを保持するために最大の開きを捨てることによって、時間の長さの中程度の/a/より区別することはできない。別の例として、母音の軟口蓋系列(serie)のために、発声器官での調音的空間は、硬口蓋系列におけるそれよりも狭い、すると硬口蓋でよりも、軟口蓋で音韻的に違った多くの間隔の程度を保持するのが困難であろう。ある言語で前(硬口蓋)系列では間隔の中間的な種々の程度を保持する一方、後(軟口蓋)系列ではそれらの内の一つが排除される。同じく、発声器官の怠惰は、別の多くの音声的变化を説明する(音韻的変形の起源)、たとえば同化、弱化等々、これらは、まずディスコースを変化させる、しかしその行動は体系に反映されることになる。

77 . b) 同一の体系にとって単なる外的要因の中で、最も重大なも

のは、言語の異なる社会的・地理的環境への転移である。ここでは基層語(sustrato)と他の言語層(estratos)の問題について試みる。二言語併用にまつわる問題と、接触している言語(これは、地理的接触ではなく、二言語併用、話し手の心で二つの言語の接触ということの意味する)等について考えてみる。

ある言語が異質の言語共同体に課される時、急激にはそれを採用しないということが知られている。新しい言語が一般化する前に、多少の期間の二言語併用の時期が先立ち、その間に古い言語は忘れられる。しかしお互いの要素の混ぜ合わせが行われる。決定的な勝利は、しばしば勝った(生き残った)体系の修正を伴う、そしてその結果は、二つの音韻的体系の妥協ということになる。基層の跡は、たとえばスペイン語に現れている。*f*-と *h*-の交替だけではなく、他のすべての子音的進展は、ある学者によればスペイン語の基層言語の永続的影響によったとされる。

しかしこれが常におこるとは限らない。ある言語学者の努力にもかかわらず、一般にアメリカのスペイン語の音韻体系がプレ・コロンビア諸言語の体系の跡(vestigios)を示しているという事を明らかにすることはできなかった。スペイン系アメリカの体系で観察されるのは、言語が別の環境へ転移したことの結果とは別のものであろう、つまりスペイン人の入植において干渉した色々な地域の体系の均等化(nivelación)。イスパニアのスペイン語の体系からアメリカのスペイン語の音韻体系を分けるのは、植民地化の数世紀の間のイベリア半島のスペイン語の一般的体系内で示していたバリエーション間のちがいを消し去ろうとする妥協である。

78 . 内的要因

体系の外から、また発話のバリエーションによって導入された動揺(perturbaciones)に対峙し、言語はこれに反応する、つまり、理解することの必要性が、個人に、体系が正確にまた間違いなく機能し続けるように個人の発話を導くべく強制するのである。そのためには、体系の各実体(entidad)は、音声の外的記号(las senales exteriores fonicas)によって区別され続ける。それで音韻的変遷(mudanzas)にお

ける内的な本質的要因は音素的区別を混同せずに保持しようとする必要性である。

このことは、発話の中でしばしば見られる変容を単に保持し続ける、そして体系は前のものと同じであり続ける。たとえば（ここでは、体系内ではなく、ディスコースの中での音素的行為について論ずるのであるが）、ラテン語の語末の *-s* は、発音されなくなった、しかしながら逆に働く作用がこの過程を押しとどめた、それでイスパニアに達したラテン語では語末の *-s* は保持された。つまりこの場合には、音韻的変容はなかった、ということであり、これは失敗した動揺の徴候であったにすぎない（所謂、東方のラテン語ではこの変化が勝ちをおさめた）。

また別の場合、音声的変容は、一般化されある区別を失うことになる。音素的区別を他の言語的セクターでの違い（語彙的、統辞的等々）と交替して体系の正確な機能性を保持することもあり、またまた初源の変容をつぐなうような別の音素的変容（またはそれらの内の1つの系列）を導入することもある。まず最初の場合の例は、音素的区別の合一によって作られた同音異義の間の紛争である。これは他の手段によって解決される。それで *oculu*(目)と *oleu*(油)で多分発生する(同音異義語の)衝突を前にして、スペイン語では *-c' / -ly-* (これは融合した)の音的ちがいは、*ojo/aceite*(目/油)という語彙的ちがいと交替した（もちろん、この交替には、まさに歴史-文化的な要因が関与したのである）。同じように、アメリカのスペイン語で *cocer*(料理する)と *coser*(縫う)の合一(*c* と旧い *s* との同等化によって)すると、語彙的な違い *cocinar/coser*(料理する/縫う)によって区別するようになった。

二番目の例としては、西方俗ラテン語で、二重子音は単純化される傾向にあった。それゆえ、それと対応する単純音と混同する。たとえば、*-tt-*、と *-t-*とのちがいを保持しようとする意図は、*-t-*を *-d-*にまた、*-d-*を *-d-*にそれぞれ変化した。それで：

-tt-, -t-, -d- \longrightarrow *-t-, -d-, -d-*

のようになり、これによって体系の機能性は保持された。

別の例は、イスパノラテン語で口の開きが中位の位置にある 2 つの /o̞e/ と /œ/ が混同される傾向にあった。この母音間の違いの保持は、スペイン語では /œ/ の二重母音化という手段によって獲得された。それで体系内の音素的違いは、ディスコース内の音素的違いと交替した: e/œ ie/e

79. またある場合には、音声的変容が、最終的に受け入れられるようになるために、体系それ自身によって有利に働くことがある。これは最小努力の法則という構造の力や、発話ではたらいっている惰性の力である体系の経済傾向によっておこる。この経済的傾向は何かということを理解するためには、全く弁別的なもの、つまり音韻論で本当に問題となるのは、音素ではなく弁別的特徴であり、音素は弁別的特徴の同時共存的な複合体である、ということを知っておくべきである。図式化して弁別的特徴を示そうとすれば、それらは、相互に交差しながら体系を形成しているということであり、種々の有意味な特徴の組み合わせられたものが、音素である。ある言語の弁別的特徴がより経済的に組み合わせられていけば、最小の数の弁別的特徴を使って、区別される音素の数は、多くなるであろう。また弁別的特徴が有機的に組み合わせられていないとすれば、区別すべき有意味な特徴の数が多くなり、また音素の区別も複雑になるであろう。体系は、経済によって最小の弁別的特徴によって可能な音素の最大数を区別する傾向にあり、また相関関係を確立し、孤立した対立を排除しようとする傾向にむかうことになる。

この経済という傾向と関連して、言語が弁別単位として利用していない体系の弁別的特徴の組み合わせを示すために《空の小屋 = 体系の隙間》(casillas vacias)[英語で hole in the pattern = 構造の穴]という図式的表現が用いられる。この〈空〉の場所は、取っておかれた小屋であり、新しい音素によって占有されることになることもあれば、または体系内で交互している諸特徴のうちの1つまたは幾つかの消失によってもぎとられ消滅することもある。たとえばある言語で音韻的価値が、唇音、歯音、軟口蓋音で区別され、一方有声と無声で区別されている場合、そして、これらの弁別的特徴が組み合わせられて次の音素を示している場合には

p *t* *k*
b *d*

《軟口蓋》と《有声》という弁別的特徴の組み合わせによって、1つの空いた場所が未使用の可能性として存在することになる。これは新しい区分を獲得する必要はなく、同じ体系内の孤立した音素によって占有されうる。たとえば/*w*/が/*g*/に移行するかもしれない。実際には、《軟口蓋》は *k/p* と *k/t* の対立によって区別され、《有声》の特徴は *p/b* と *t/d* の対立を区別している。それゆえ経済への傾向は、以前の孤立していた音素を、《空いた小屋》の中へと統合する。

同じ体系をもつ別の言語の場合、この《軟口蓋》と《有声》という2つの特徴の再結合によって区別されていたこの空いた小屋が、消えてしまうことがあるだろう、これと一緒に《有声性》という特徴を完全に失ってしまい、体系を次のようにしてしまう；

p *t* *k*

または《軟口蓋性》という特徴の完全な消失によって体系は次のようになることもある。

p *t*
b *d*

それで俗ラテン語において、半母音の *u* は、子音になった時に体系における唇歯音素/*f*/の有声の相関の空いた小屋に統合された【つまり/*v*/となる】。

これらの変容は、たまにただ一つの音素に影響する。一般には変形の系列を作り出す。音素は弁別的特徴の同時存在的な複合体であり、音声変化を作る時に変化するのは、これらの弁別的特徴の内のあるものの実現体であることをおもいおこすべきである。たとえば有声音素が無性化する時、実際におこるのは、《有声性》という特徴が有効性を失うのであり、これは同じ環境でこの特徴を示すすべての音素に起こるはずである。それゆえ変容は体系の唯一の場所に

影響するのではない。ラテン語の-p-が有声化する時、これと共に -t-, -k- という系列を形成している他の音素にも同じことが起こる【つまり -p- > -b- という変化が起これば、 -t-, -k- > -d-, -g- と変化する】。

80. さて、体系の音声的乱れと、有効な区別を保持しようとする傾向の間での衝突に際しては、体系の保存的意図が常に勝利するということはない。そしてわれわれはしばしばお互いに区別するのを停止した音素的単位の合一というものに出くわすことがある。この体系の破壊は、時々言語の他の分野での相違化によって修正されることがある、とはいっても別の相違化によって償われない音素的区別の消失というものはある。区別して理解しなければならないことに対して、いかなる害をもたらさない時、また実際に古い区別が余剰的であり、体系にとっての贅沢である時に、音素的区別の消失ということが起こる。

このような場合、問題の音素的ちがいは、小さな機能負担量 (rendimiento funcional=functional load) しかなかった、つまりたまたましか意味作用の区分記号として役立っていなかったと言える。たとえばフランス語の /ø/ と /ɛ̃/ の区別は、少しの単語にだけ限られる brun/brin^{訳注}、この区別が小さな機能負担量によって消えるのは自然である。しかし、対立の機能負担量が小さいとあって、すぐにまたは必ず消失すると結論すべきではない。別の構造的要素が、ある対立を守らんとして、ほとんど効力ゼロにもかかわらず、干渉してることがある、それは体系の統合性の程度の多寡によるのである。体系の別のものとの相関関係がなく、孤立している時に、小さな機能負担量の区別の消失は容易に起こるのである。しかしもし、体系との関係が孤立した特徴にもとづくのではなく、相関関係に属しているなら、区別は保持せられることになるであろう。たとえば英語の /θ/ と /ð/ は小さな機能負担量しか持っていない。しかしこのペアを区別する特徴、つまり有声性は体系の別のペアをも区別している： /f/ と /v/ ; /s/ と /z/ ; /ʃ/ と /ž/ などである。また θ/ð の負担量が小さいとしても、有声性/無声性を必要としている対立の機能負担量は莫大なものである。

訳注 brun/brin フランス語辞典では、発音は [brœ̃]/[brɛ̃] と記されている。

8 1 . 音韻的変遷の過程

上記では、ほとんどの音韻的変遷は孤立的におこらないということを示した。体系内での変形について取扱ってきたので、その変形の効力は、体系の全分野に反映するのは自然なことである。

音声変化が完了する時、音韻的変遷は変化を受けたそのユニットに限定されるのではなく、それと関連しているすべてのユニットにまで及ぶのである。

われわれが通時音韻論を論じようとする時には、通常、連鎖した変化(cambios concatenados)の系列ということが問題となる。その変化の連鎖の中での変形の始原の衝動がはじまった時点を明示するのは容易ではない。

74 節の図式にもどって、例えば、体系の中で完全にことなった音素 A, B, C があるとす。そして、ある音声変化が音素 B の実現体に影響を及ぼし、音素 C の実現体に近づくと仮定しよう。もし言語の完全な機能性の要請が活発に働かないとするなら、この変化は、B と C の実現体の同一化へと導き、結局、音素的合一化(confluencia)へと導くことであろう。しかし、言語体系を有用なものとして、また間違いなく保持しようとする社会的必要性によって、危うくなった区別を救わんとするための手段を提供することもあるのは、すでに見てきたところである。図示的に表わせば、B が C の方に変化すると、ある種の圧力を音素 C に与え、このことに対する反応として、C は B との混同より逃れんとし、その分散の領域をゆずるようになる：

B C

そうすると、今度は C は、B によって受けたと同類の圧力を別の隣接の音素に加える。それで他の面よりすれば、B の実現体の移動は、A と B の間の弁別上の安全閾をかなり広げることになる。音素 A は、その古い限度内で実現されつづけることができるし、または B の移動によって調音的(聴覚的)隙間に出会う時、同じように A が B の方向に移動することも可能である：

A B

この二つの移動の理論的タイプ、一つは圧力による移動(C)と、もう一つは、牽引による移動(A)は、しばしば一緒になって働くことがある。それでわれわれは音素的移動の一列を持つことになる。

A B C

この移転において、変形が最初に始まった場所を示すのは容易ではない、たとえば西ロマンス語においては、二重子音の単純音化か、または無声子音の有声化か、はたまた有声子音の摩擦音化か：

-pp- -p- -b- -b-

しばしば音声変化の生じた時期を言うことができる、そしてそれを年代的にならべることがもできる。しかし音韻論において、これらの系列の変化のうちのどれが最初で、どちらが最後であるかを言うのは、体系内での変化による反響や結合関係によって生じたのであるから、困難である。

82. 音声変化によって、可能性として2つの結果をもたらすことになる、1つは、以前は異なっていた実現体の混同、もう1つは、実現体の内でのより大きな分裂である。これらの変化は、多くの場合、体系に影響を与えずに、結合変種の数または、ある音素の分散の領域を大きくしたり小さくしたりするにすぎないことがある。たとえば、*/r/*と接している*/e/*は、スペイン語では [e] と実現される、しかしこの音の変容が、この音と最も近い音素*/a/*との違いをなくさない限り、体系に何らの影響を与えることはない。アストリア地方のことばでは、語末の鼻子音は、すべて軟口蓋 [ŋ] と実現される。この位置では調音点は有効性を欠いているので、この [n] > [ŋ] という変化は、決して体系に影響することはない、ただディスクコースにおいて 変種 [ŋ] がより頻繁になるだけである。

また他の場合、音声変化は音素のある結合変種を変容させ、別のちがう音素の変種と同じにしてしまうことがある。しかしながら体系は動揺しない、というのはこの両音素は、他の文脈的位置で異なる

ったものとしてそのまま存続するからである。しかしディスコースにおいては、(複数)音素の分布上の音韻的変遷というものがある。たとえば西カタルーニャ語では、音素 $/a, e, \epsilon/$ の弱強勢変種は、 $[a]$ に合一し、強勢位置では、この3つの音素は別々に用いられており、体系は変容を受けない。別の多くの地域の俗スペイン語では、 $/r, l/$ の内破音的な変種は混同する。しかし他の位置では、異なったものとして別々に実現されているので、ディスコースにおいては変わっているが、体系は変わっていないのである。

また、体系を変えることなく、音声変化が1つのまたは種々の音素的相違の弁別的内容を交替させることもある。たとえば有声性という手段によって $p/b, t/d, k/g$ を区別している言語で、無声と有声の代りに緊張性/弛緩性(tension/flojedad)の平行的關係[つまり $/p, t, k/$ が緊張音 $/b, d, g/$ が弛緩音]に大きな重要性を持たせることが起こりうる、しかしながら、その相関關係は物質的には異なったものとなったとしても、体系においては同じままである。すべての短母音を開音に、またすべての長母音を閉音に変化させた俗ラテン語の音声変化は、ディスコースの關係や、母音音素の弁別的内容の關係を変えたが、体系にはなんらの変化をもたらさなかった。つまり体系は、音量と音質の違いの出現する以前と同じように、母音を3段階の口の開口度と、2系列の[開音・閉音という]共鳴度によって区別されていた。

8.3 . 音韻的変遷のタイプ

真の音韻的変遷は、音声変化がその關係やその価値を変えたりして、体系に影響を及ぼした時、または必要性に応じて、音素の弁別的内容や、ディスコースにおいて音素の分布を变形した時に作られるのである。それで、16世紀末・17世紀初頭のカステリヤ語の音声変化、それによって旧い音 $[\check{s}-\check{z}]$ は $[x]$ に変わった、そしてこの変化によって変容せられたのは：

- a):このような音素が現れていたディスコースの音韻的構成。
- b):($/\hat{c}/$ に対立していた)2つの音素 $/\check{s}\ \check{z}/$ の弁別的内容は、($/k/$ に対立する) $/x/$ に変わった。

c):体系の構造（既に存在している軟口蓋系列の閉鎖音/k/に対応する無声摩擦音を獲得した）

音韻的変遷の一般的公式は次のようになる：

$$A : B \quad A' : B'$$

ここでは A と B、A' と B' は、ある限定された関係(音素間の対立、音声変種間の対照他)を設定している二つの項目を示している。この一般的公式において、3つのカテゴリーを区分すべきである：

- a) A:B の関係が音韻的有効性を有していない、つまり、A と B は単に音声変種であるにすぎず、A' と B' の結果としての関係が音韻的有効性を有している時。
- b) A:B の関係が音韻的で、A':B' の結果が音韻的有効性を欠いている時。
- c) A:B と A':B' の双方の関係が音韻的である時。

最初の例 a) では、変化は音韻的に新しいこととなった創造に導く、2番目の b) では、変化の結果は、区別の消失である。3番目の c) では、音韻的区別の変形であり、しかし創造もしないし、消失もしない。

最初の a) の変化を音韻化(fonologización)と、タイプ b) を非音韻化(desfonologización)と、またタイプ c) を転音韻化(transfonologización)と呼ぶ。一般的に、体系の諸ユニットに注目すれば、音声的変遷は次の3つのタイプになる：

- a) 新しい音素の出現
- b) 音素の消失、つまり弁別機能の消失
- c) 体系内での一つの音素または種々の音素の関係または位置の変化。

これらの場合、Weinrich が提案しているように、上記の用語は弁別的特徴の変形を示すためにとっておいて、その代わりに音素化(fonematización)、非音素化(desfonematización)、転音素化(transfonematización)を使う方が都合が良いかもしれない。

8 4 . 音韻化

たとえば音素の実現体の変種が、ある原因によって、その音素の普通の実現体より離れるか、またはその同一性(identidad)の認識の消失が一般化した時、その変種が弁別的機能を得る場合がある。それによって問題の変種が、音素特有の弁別的特徴を伴う新しい音素になる。一般的公式では、ある音素 N の変種 A,B はディスコースのいろいろな場所に現れえる。たとえば、A は音素 X の前でのみ、B は他のすべての場所で、それで音声変化の原因により、B は音素 X の前で使用されるようになり、変種 A,B は同じ文脈の前で弁別的価値をともなって現れる時、変種として考えられるのをやめる、つまり音素化される、そしてそれを区別していた音素的な違いは、音韻的違いになる。A',B'は A と B と音声的には同じであっても、その時はもうちがう音素である。たとえばラテン語の音素/c/の硬口蓋音変種[k']は口蓋母音/e,i/の前でだけ現れていた。しかし音グループ/qui/の内の/u/の要素が消失した時、軟口蓋変種[k]は、また硬口蓋母音の前で可能であった、それによって、旧い変種[k']は/k'/と/k/を区別して俗ラテン語では音素化した。

[k] : [k'] /k/ : /k'/

勿論、新しい区別は、無よりは創造されない、つまり一般に新しい音素は、ディスコースで偶発的に消えた別の要素の弁別的特徴を引き継ぐのである (§87)。

また音韻化は、所与の言語において存在していない外国語の音素を採用する時におこる。2 つの言語が接触し、その共存関係が親密になった時、多少同価の土着の音素によってそれを再現させる代わりに、一方の言語によって他方の言語の音素を真似ることがある。もし、聞きなれない音素が現れる借用語が一般化すると、そのような音素が、違った階層に属しているものとして感じられるのを止め、そして体系に組み込まれる。たとえば アラビア語は、無声の /ç/ を欠いていた。それでモサラベ人のことば(hablas mozárabes)との長い期間の接触が原因となって Al-Anclalus のアラビア語は、その固有の体系では聞きなれない音素 /ç/ を音素化した。そしてこの音を使って カスティリア語の歯音破擦音 /ç/, /ʃ/, /z/ (綴字 *ch, ç, z*) をすべて差し示したのである。【南米の】グワラニ語はカスティリア語の音素 /ç/ を知らなかった、しかしこの音素を音素化して、自分たち

の固有の体系に入れてしまった。これらの聞きなれない音素の音韻化は新しい音素を採用する方の言語にすでに存在している相関関係に入る時、つまり、この体系において所謂「空いた小屋」がある時に、または聞きなれない音素が、採用する言語に単純変種として存在している時には、もっと容易に起こることがある。

8 5 . 非音韻化

二つの音素が合一する時、つまり特質的特徴の対立を失う時、その音素は単なる結合変種、文体的変種となるか、または唯一の実現体へと合一化する。またある時には、区別されていたものが消失して、孤立したり、またある時には、それらの変種の保持を根づかせるのが相関関係であったりする。

たとえば最初の場合の例として、カスティリアや中世カタルーニャ語（またバレンシアのことばでも）では、*/b,v/*はちがった音素であった。*/v/*が *[b]* 両唇音として実現される時、この*/v/*は*/b/*の母音間の 実現体 *[b]* であったと混同した。その結果として、*/b/:v/*の最初の関係が *[b]: [b]* と変わってしまい、結合変種間の違いを区別しなくなる。

2つの音素の実現体が、唯一の変種に合一化することがある。(A:B A'=B'): つまりスペイン語のあることばでの */j/y* の対立の非音韻化という場合である。そこでは、この2つの音素はただ1つの変種*[y]*と同一化する（またその音声的派生音と同一になる）。

すべての相関の系列の非音韻化の例は、カスティリア語の16世紀末、17世紀初頭の有声と無声のシュー音(sibilantes)の同一化である、つまり */š/*と*/ž/* (既に摩擦音となっていた)、*/s/*と*/z/*、また*/š/*と*/ž/* (既に多少軟口蓋音化していた)は、現代カスティリア語でそれぞれのペアが */θ/,/s/,/x/*へと合一化した。

8 6 . 転音韻化

孤立していた対立が（すでに存在している相関関係に組み込まれ

て) 比例的になる時、または、ある比例的対立が孤立する時、または1つの相関関係(またはその内のあるペアー)が、体系のちがった位置を占める相関関係へと替わっていく時に、結果として起こるのは、転音韻化である。この場合には、音素的区別を作り出しもしないし、また失いもしない。つまり、この場合におこるのは、体系の構造の再組織化である。例としては、カスティリア語の [s̄] と実現されている古い音素 x の実現体 [x] への移行は、転音韻化である。つまり /ç/ との相関であることから、/k/ の相関に移る。同じことがラテン語の -tt- -t-, また -t- -d-, また -d- -d- の変形の場合におこった (§78)。

87. 融合とディスコース内での分裂

われわれがこれまで検討してきたすべての例で使用された、A:B A':B' という公式の項目 (terminos) は、体系のすべての単位に適用される。しかし時々変化が隣接する単位のグループで作られることがある、つまりディスコース内の音素グループが1つの単位となる場合がある。もしこの単位が体系にすでに存在するなら、音韻的变化は、ディスコースでの音素の再分配(repartición)を変えることに限定されることになる。もし結果としての単位が、以前には弁別的価値を伴って存在していないなら、体系において音韻化を作り出すことになるであろう。

また、音素的単位がディスコースにおいて音素のグループに分裂するという事も起こりうる。もし最初の単位が、体系より消えるなら、その時、非音韻化をもたらすであろう、またもし結果としての単位が以前の体系に存在していなかったなら、音韻化であろう、またもし1つのまた別の単位が変化以前にすでに存在していたならば、その結果は、体系に影響しない、それはディスコースでの音素分布にのみ影響するだけである。

音素的分裂の例は、スペイン語の二重母音化において見られる。[ie] に二重音質化(bimatizado)されたラテン語の音素 /e/ は、すでに存在する別の音素とその [i][e] の要素を一致させる時、非音韻化される。つまり体系において /e/ の非音韻化となる。

$$/e/ : /e/ \quad [e] : [e]$$

ディスコースでは、転音韻化となる。

$$/e/ : /e/ \quad /i+e/ : /e/$$

他の例、レオン方言のある地区で、*/i/*以外の舌母音の前にある*/š/*は*[j]*という要素になる。一方、*/i/*の前の*/s/*は*[š]*へ口蓋音化された。それによって、結果は体系において*[š]*と*[s]*は、結合変種となる（つまり、非音韻化である）*/š/ : /s/* *[š] : [s]*、一方、ディスコースでは、古い音素 */š/*の*/s+i/*への分裂によって、以前の*/š/ : /s/*の関係は、*/si/ : /s/*へ転音韻化される。

体系内での音韻化ではない音素的融合(fusion)の例は、スペイン語でのラテン語の音グループ、*-ct-*と*-lt-*の変化である。これらは */ç/* へと変った。しかしこの変化によって*/k/*も*/t/*も*/i/*も音素として消えなかったし、*/ç/* は新しい創造ではないので体系は変化しなかった。一方ディスコース内では、*/ct/ : /lt/* */ç = ç/*という非音韻化が作られ、他方 */ct/ : /t/* */ç/ : /t/* という転音韻化があった。

体系内での新しい単位の音韻化を伴う融合は、ラテン語の音グループ*/ny/*である、これはカスティリア語で */ñ/* を作った：

$$/n+y/ : /n/ \quad /ñ/ : /n/$$

また別の例は、フランス語の古い母音 + *n* というグループの鼻母音への移行である。このようにして、母音の鼻母音性の相関関係を作り出して、種々の新しい音素を音韻化した。

8 8 . 分散と収斂(divergencia y convergencia)

自然科学の方法論を部分的に取り入れて生まれた歴史音声学は、諸問題の回答を探し求め、その発生の系譜によって言語間の縁戚関係を設定しようとしてきた。Meillet は、すでに種々の言語間の一致は、よってきたる母語の消失後の並行的発展によるということを示した。音韻論は、その結果として、音韻的体系内での発展の平衡性

によって種々の言語間の関係を示さなくてはならない。それで、系譜的方法が打ち建てた言語の語族というものがある一方、その構造の類似性によって《関連言語》、または《ブロック》と呼ばれるグループに分けることができるであろう。同じ共通の源より派生した諸言語が、音声的および音韻的発展のゆえにまったく完全にことなつた構造を持つようになることもあるであろう。またこれとは反対に、全く異なる起源の種々の語族が類似した音韻体系を所有するようになることもあるであろう。この系譜的な親縁関係とは関係のない言語的親近性(*afinidad lingüística*)は、共通の起源というものを除外するものではないが、しかし共通の起源というものを排除する。

音韻的には、言語に2つの傾向というものがある：すなわち分散と収斂である。分散的言語とは、共通の体系よりうまれたのであるが、その構造に関して根本的に違ってしまった言語である。収斂的言語とは、親縁のない体系より生まれたのだが、その構造に関してよく似てしまった言語である。ある一時期の同時代的な言語の比較は、系譜的な新縁ではなく、音韻的新縁関係を明らかにする。これによって、体系の多くの点で合致する親近性の、または収斂的言語の関連性を設定することができる。

フランス語とスペイン語のように、系譜的に新縁関係にある2つの言語は、その分離的發展によって、スペイン語と現代ギリシャ語の関係以上に音韻体系が違っている。スペイン語と現代ギリシャ語は系譜的には遠い関係であるが、その収斂的發展によって、疑いもなく音論的親近性を示している。

このことは、異なつた言語で見られる共通の特徴(複)の解釈の場合に注意することを要求する。しかしながら、常にその歴史的または先史的に以前のものの中に2つ、またそれ以上の言語の共通の現象の理由を探したりしてはならないし、また同じ基層語(*sustrato identico*)などを仮定すべきではない。たまには、共同体のよつてきたる根拠は、単にその共同体の進展と平行した発達であることがある。この平行性は一体、何によるのであろうか。

一般に、種々の言語間の構造的親近性は、言語地図に連続的の広がりとして示される。近い言語間の文化的接触をともなう地理的近隣

性は収斂的發展の遠い原因となることがある。同じように歴史的、社会的、政治的、文化的理由が新縁関係にある言語や、地理的に接している言語の分散的発達の原因であることもある。この場合には、Saussure によって示された、起動させんとするものと、それに反対するという2つの力が干渉する：一つは、孤立的な精神で、特殊なもの、個別的また分散へと向かう力であり、もう一つは、共同的な精神で、相互交換、一体化、また収斂へ向かう力である。

音韻的分散や収斂の理論を【言語】地理学的方法に応用すると、同じ音韻的特徴が有効性を有する点を集めることによって等言線を設定することが可能となる。これら等言線をグループとして集めてみると、種々の言語間の構造的親近性を明らかにする音韻的領域というものが明らかになる。このようにすると、ポルトガルからロシアまでの自由アクセント付けの《地中海的》地域が示される。また別の広大な地域としては、子音の硬口蓋音性の相関関係のそれである、これはバルト海近辺の諸語、フィンウゴール語、スラブ諸語から日本語にまで広がっている。

89 . 方言学と通時態

方言的研究の最も重大な貢献は、言語研究に空間的な要因を導入したことである。昔の歴史文法は時間における言語の変異を観察した、一方、方言学は空間における変異に考慮を加えるようになった。方言学は、《言語》と関連していると考えられている《方言》の中の《逸脱》を示さんとしていたのであるが、原理的なもの、つまり固有の方言的体系の基盤とは一体なんであるのかの研究するようになったのである。例えば初期の音韻学者達は、Trubetzkoy のそのうちの一人であるが、すでに方言学を言語科学の新しい構造的な方向付けのために組み入れんとしていたのである。これまでは、方言学は新思潮とは切り離された（時には敵対する）ものとみられてきた言語学の一分野であったのは確かである。しかしながら、言語地理学（方言学の直接の成果）は、ある人が《体系》《時間》《空間》という3つの要因を考慮に入れる通時論的方法を擁護する時に示しているように、通時的な研究に計り知れないデータを提供していることは間違いないところである。

また方言学は、音韻論的な基準に基づく方言の記述を、ある方言の境界決定や、史的構成を説明するために適用することによって、これまで方言学は言語学的ものではないとする研究の低迷状況より抜け出すことが出来るであろう。ごく最近まで、方言学的研究は、たとえばスペイン語の分野ではほんの僅かしか行われておらず、単にラテン語の音と方言の音との対応の公式だけを探しだし、古い歴史文法によって引かれた枠組より抜け出すことはなかった。そして結局のところ、スペイン語には知られていない2, 3の調音を見出したにすぎず、方言体系の記述は行われなかったし、侵入してくる【標準】スペイン語とどういう関係があったのかの記述も行われてこなかった。Martinet も言っているように、一般に方言学者は、言語学者である限り、方言の体系を全体として記述しなければならないのであるが、その代わりに、《珍奇な遺物の骨董品収集家》のようにふるまってきたのである。伝統的方言学者は、通常二つの層（方言と公用語の侵入）を区別しなかったし、またもしこの区別を暗黙裡にやっていたとしても、方言学者は古語における《純粹》なものに注視し、まさに現在において現実に使われているものの内の一部についてだけに視野を限定し、それによって、いわゆる方言の純正な要素と同じ価値を伴って機能しているが歴史的には方言とは言えない公用語の影響等を排除してしまっているのである。

別の面よりすると、音韻論的方法は、《方言》ということばによって解されるものをより厳密に規定するのに貢献している。ある基本的な類似性の枠内で考えれば、方言とは、公用《言語》（文学言語）と呼ばれるものに対して、ある逸脱（特に音声的逸脱）を示しているある共同体の全ての発話（ことば）であると通常は考えられている。しかし、一方言の地理的限界を決めようとした時に、しばしばそれは曖昧であり、また段階的であり、またある現象は他の地域に侵入し、また別の現象は《方言区域》の全域には達していないという事実に出会うことがある。このことによって、方言は厳密な限界の無い《連続体》を形成し、人に意識されることなく変動しているという観念が表明されたり、また《推移する方言》などについて云々されることにもなるであろう。その結果として、音声的現象の限界はあっても、方言の限界はない、などということになってしまう。音韻論の体系的基準を用い、また機能的視点よりこれらの現象を観察する時、方言間でそれぞれお互いに分離するか、またはグループ

分けすることによって、方言をよりよく定義する方言的体系を見出すことは、可能である。隣接の方言体系が接しあっているときには、共通体系(diasistema)を記述できるだろう。この共通体系では、体系間の相違は同じ音韻的単位の変種にすぎない。そして、方言を特徴付ける《連続性と非連続性》の役割は明瞭である。

このように方言を分ける柵というようなものの見方は、方言そのものよりくる特質の結果である。方言は、分散の結果としての、以前の1ユニットの分割化の歴史的産物であると考えられる。しかし、しばしば以前の発話の複合性の1ユニットへの収斂の産物であることもある。使用される用語の曖昧さによって、方言の状況をより混乱させることがある。たとえばアストリアとエクストレマドウラ地方に広がっている種々のことばに言及するのに、あたかもある時期にこの地域には言語的ユニットがあったかのごとく、《レオン方言》という語が用いられる。この《レオン方言》は、決してこれまで存在していなかった、というのはそれを作り出そうとしていたであろう(その内のある共通語[コイナー]による、またはその内の一つのことばの相対的支配力によって)統合への過程は、隣接のカステイリア語の拡大によって押しとどめられたのである。実際に存在しているのは、共通の通時的・共時的特徴をもった(諸)方言であり、しかもお互いに差異がある。それで、この場合われわれにできるのは、《諸レオン方言》のことばの共通体系を描出することであり、レオン語の一つの体系を描くことではない。

参考書目：

1,5,30,31,32,33,54,63,68,73,82,83,87,88,89,102,103,104,109,110,112,114,116,130,131,133,142,143,144,149,152,153,154,161,162,166,169,172,175,176,177,207,209,221,227,228,233,234,244,251,252,253,254,256,257,258,259.